

教職課程(中等国語)における

主体的な学びの実現に向けたNIE活用の有効性

——「日本語表現法Ⅰ」における紹介文集の作成を通して——

伊 木 洋

はじめに

本稿では、二〇一七年度Ⅰ期教職課程(中等国語)必修科目「日本語表現法Ⅰ」(三年次)において実践した紹介文集作成の取り組みをもとに、教職課程(中等国語)における主体的な学びの実現に向けたNIE活用(注1)の有効性について考察する。

教職を目指す学生にとって、自らが主体的な学びを体験することは、指導者として単元構想する際に、生きて働く力となる。自らが実感した主体的な学びの充実感・達成感は、指導者として主体的な単元を構想する意欲に繋がっていく。教職課程における学習者主体の学びの実現に向けた授業改善が求められる理由はここにある。「日本語表現法Ⅰ」では、教職課程における主体的な学びの実現に向けて、紹介文集作成のプロセスにおいてNIEを活用している。本稿では、具体的な指導の実際を取り上げ、教職課程における主体的な学びの実現に向けたNIE活用の有効性を明らかにしていく。

「日本語表現法Ⅰ」では、コンポジション理論を基礎として、文

章を書くための知識と方法を学ぶとともに、文字言語及び音声言語による表現活動を通して、言語表現能力の向上を図っている。大学生として、社会人として、さらに中学校・高等学校の国語科教師及び日本語教師として求められる文章表現力及び音声言語活用能力の向上を図るとともに、その指導法、とりわけ「書くこと」の学習指導について理解を深めることを目指している。

「日本語表現法Ⅰ」では、書くことの生活の自己点検を学びの出发点とし、定義、描写、説明、論証、物語、書き出しの工夫、聞き書きなど、さまざまな文章表現の基本について実作を通して学んでいく。「書くこと」の学習指導についても理解を深めさせるため、中等国語教育の先達であり、NIEの先駆者でもある大村はま氏の実践を紹介しつつ、学びを深めている。主体的な学びの実現を目指して、紹介文集の作成に取り組む中で、受講生は山陽新聞社の瀬尾由紀子氏に情報発信に関わる者として大切にすべきことや表現の工夫について指導を受けている。瀬尾由紀子氏には、はじめに基礎講座として、新聞を題材として表現に関する心構えや工夫に関する講

義をお願いし、その後、紹介文集の企画案について具体的に指導していた場を設定している。紹介文集の企画案を全体で提案し合っている、その後、グループごとの編集会議に瀬尾氏に加わっていた、具体的な指導や助言を得て紹介文集を作成している。

一 学習指導要領における「情報の扱い方に関する指導」の重視

二〇一七年（平成二九年）三月、中学校学習指導要領が告示され、二〇一七年六月、中学校学習指導要領解説が示された。中学校学習指導要領解説国語編の第一章総説には、「このような（急速に変化し、予測が困難な）時代にあつて、学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構成することができるようになることが求められている。」（注2）と記されている。

そして、新しい時代に求められる「生きる力」を具体化し、育成を目指す資質・能力の三つの柱として、「生きて働く『知識・技能』の習得」、「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成」、「学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養」が示されている。さらに、子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするために、「主体的・対話的で深い学び」

の実現に向けた授業改善の推進が求められている。

国語科においては、こうした考え方をふまえたうえで、学習内容の改善・充実として、「語彙指導の改善・充実」、「情報の扱い方に関する指導の改善・充実」、「学習過程の明確化、『考への形成』の重視」、「我が国の言語文化に関する指導の改善・充実」の四項目が示されている。このうち、「情報の扱い方に関する指導の改善・充実」については、「急速に情報化が進展する社会において、様々な媒体の中から必要な情報を取り出したり、情報同士の関係を分かりやすく整理したり、発信したい情報を様々な手段で表現したりすることが求められる。（中略）話や文章に含まれている情報を取り出して整理したり、その関係を捉えたりすることが、話や文章を正確に理解することにつながり、また、自分のもつ情報を整理して、その関係を分かりやすく明確にすることが、話や文章で適切に表現することにつながるため、このような情報の扱い方に関する『知識及び技能』は国語科において育成すべき重要な資質・能力の一つである。」（注3）と記され、情報の扱い方に関する指導の重要性が示されている。

「日本語表現法I」においては、言語表現能力の向上を図るとともに、教職課程（中等国語）の必修科目として、国語科の学習指導で求められている方向性をふまえて指導を行う必要がある。国語科の担当者として「情報の扱い方に関する指導の改善・充実」を図っていくとき、その一つの方法としてNIEは有効に機能すると思われる。「日本語表現法I」において、まさに生きた情報を日々扱う新聞記者との連携を図った試みは、国語科において「情報の扱い方に関する指導」を担う指導者を養成するという点からも有効であると考えられる。

二 大村はま国語教室に学ぶ

二〇一七年（平成二九年）三月告示、中学校学習指導要領国語科、第三学年の「書くこと」の言語活動例として、「イ 情報を編集して文章にまとめるなど、伝えたいことを整理して書く活動。」が示されている。情報を編集して文章にまとめる言語活動は、「書くこと」において、題材の設定、情報の収集、内容の検討、構成の検討、考えの形成、記述、推敲、共有など、様々な指導の場を得られる有効な言語活動である。取材の場では、目的に応じて読むことが必要になる。合わせて、編集会議では話し合う必然の場が得られる。

大村はま氏は、編集という言語活動を生かした単元として、「単元 新一年生に石川台中学校を紹介する」（注4）を構想し、実践している。「単元 新一年生に石川台中学校を紹介する」は、中学校一年生の三学期に実践された単元で、先輩になる日を待っている現一年生が、新一年生に中学校を紹介する文集を作成し、文集発表会を開くという単元である。学習者は、新一年生に本当に読まれることを想定し、新一年生という具体的な読者を想定して、取材、構成、記述、推敲といった言語活動に、真剣に取り組んでいる。紹介、説明、アドバイス、いろいろの目的のいろいろの種類の文章を書く企画が生まれ、書くことの豊かな実の場が設定されている。目的に応じた役立つ内容を拾いながら読んだり、軽重をつけながら読んだり、速く読んだりといった様々な読むこと、場があり、単元全体を通して、相談、報告、話し合いなど様々な聞くこと・話すこと、場も設定され、まさに主体的な学びが実現されている。

三 「日本語表現法Ⅰ」における紹介文集作成の実際

（一）「日本語表現法Ⅰ」の授業計画

「日本語表現法Ⅰ」では、さまざまな文章表現の基本について実作を通して学ぶとともに、「書くこと」の学習指導についても理解を深めさせることを目指している。さまざまな文種の指導について具体的に学ぶために、大村はま氏が『中学作文』（注5）に示している述べ方の指導の実践を紹介し、実際に提示されている課題を実作することを通して、学びを深めている。受講生は、そうした基本的な学びを生かして文集作成に取り組んでいく。

文集作成においては、「日本語表現法Ⅰ」における主体的な学びの実現を目指して、大村はま氏の実践「単元 新一年生に石川台中学校を紹介する」をモデルとして、紹介文集の作成に取り組ませたいと考え、「単元 OC（オープンキャンパス）でノートルダム清心女子大学文学部日本語日本文学科を紹介する」を構想し、実践した。オープンキャンパスで、実際に高校生に紹介文集を示して読んでもらう実の場を設定した。

「日本語表現法Ⅰ」の授業計画は、次のようである。

- 第一講 学習の準備（書くことの生活自己点検）
- 第二講 文章表現の基本
- 第三講 定義する
- 第四講 描写する
- 第五講 説明する

第六講 論証する

第七講 物語る

第八講 聞き書き

第九講 書き出しのくふう

第十講 編集会議Ⅰ（ガイダンス 個人企画案の検討）

第十一講 特別講義（基礎講座―伝えるための表現のくふう―）

第十二講 特別講義（企画案の共有、特別講師による指導助言）

第十三講 編集会議Ⅱ（グループ編集会議）

第十四講 編集会議Ⅲ（グループ編集会議）

第十五講 編集会議Ⅳ（グループ編集会議） 学習の整理

（二）紹介文集作成の実際

第五講「説明する」において、さまざまな説明文や紹介文を書く場が設定されている「単元 新一年生に石川台中学校を紹介する」を取り上げた。ここで、編集という言語活動の価値にふれ、この単元をモデルとして構想した「単元 OC（オープンキャンパス）でノートルダム清心女子大学文学部日本語日本文学科を紹介する」の概要を示して、個人企画案を練っておくように話しておいた。第八講「聞き書き」では、インタビューを取り上げ、紹介文集の取材の際に参考にするよう指導した。第九講「書き出しのくふう」では、大村はま氏による書き出しの練習を取り上げ、紹介文集の記述の際に生かすことができるようにした。

第十講 6月29日 編集会議Ⅰ（ガイダンス 個人企画案・取材

計画の検討）

ここまでの学びを生かして、第十講（6月27日）からは、紹介文集の作成に取りかかった。第十講「編集会議Ⅰ」のガイダンスで使った紹介文集作成のてびきⅠは、次のようである。

日本語表現法Ⅰ 第10回

紹介文集『NDSU日文』作成のてびきⅠ 2017・6・27

1 課題内容

（Ⅰ）共通テーマ

「ノートルダム清心女子大学文学部日本語日本文学科の魅力を紹介する」

目標…オープンキャンパスに参加した高校生（保護者）を読者として想定し、ノートルダム清心女子大学文学部日本語日本文学科の魅力を読者に伝える文章を書くことを通して、表現力、情報活用力を高める。

（Ⅱ）内容案

授業紹介を中心に（日文的授業を中心に キリスト教学 自立力育成科目も可）

・「先生紹介」

・「研究室紹介」

・「ゼミ生・履修生インタビュー」

・「カリキュラム紹介」

○「授業紹介」

・「資格・進路紹介」

・「書評 講義に役立つおすすめの一冊」

- ・「メッセージ・アドバイス」「写真」
- ・「個人担当頁」

(3) 条件

・記事には必ず「人」への取材を含めること。ただし、原稿は聞き書き形式に限らない。

・内容は、実際に本学で学んでいる学生だからこそ伝えられる、ノートルダム清心女子大学文学部日本語日本文学科の魅力を記事にすること。

・個人の頁をそれぞれ1ページ担当すること。書評・メッセージ・アドバイスは必須。

2 提出日等 2017年8月1日(火)第15回 完成原稿を提出

・写真製版用原稿を提出。ただし、デジタルの場合、USBデータもあわせて提出。

3 書式・枚数等

(1) 用紙 B5判(原則として縦書き。ただし、部分的に横書きも可)

(2) 活字の場合、フォントMS明朝9ポイントを本文の基本とする。手書きも可能だが、あくまでもアピールとしての使用とする。

(3) 余白 上下15ミリ 左右20ミリ 頁をうつ余白を確保しておくこと。

(4) 活字の場合、一太郎またはワードで入力すること。

4 執筆要領

(1) 各記事の最後に、()の中に取材者の氏名を明記すること。

(2) 引用文献・参考資料を明示すること。

(3) 写真・イラストを活用すること。

(4) 取材時及び原稿提出前に、ゲストの方に、文集掲載の許諾をいただいでおくこと。

5 今後の予定

6月27日(火) 編集会議I

企画・取材計画の検討 原稿個人企画案提出

7月4日(火) 特別講義 基礎講座

山陽新聞社読者局NIE推進部 瀬尾由紀子氏

7月11日(火) 特別講義

原稿企画案発表、特別講師からのご助言(瀬尾氏)

7月18日(火) 編集会議II

取材計画決定↓取材 原稿企画提出

7月25日(火) 編集会議III

取材結果の検討、原稿執筆状況の確認、推敲

8月1日(火) 編集会議IV

原稿提出 学習整理(学習記録提出)・授業評価

6 その他

・紹介文集『NDSU日文』の表紙の題字・デザインを募集します。自薦他薦歓迎。

紹介文集作成のてびき1を示して、紹介文集作成のねらいを共有し、内容、条件、提出日、書式、枚数、執筆要領を確認したうえで、今後の予定を示して、学びの見通しを持たせた。その後、グループで個人企画案を交流する場を設定し、7月11日のグループ原稿企画案発表までにグループ企画案を作成しておくよう指導した。

受講生は、それぞれが練ってきた個人企画案をもとにして、グループ企画案の話し合いに主体的に取り組んだ。限られた時間の中でよりよい原稿を完成していくために、真剣にアイデアを出し合った。第十講のコメントシートの記述は次のようである。

6 / 27 A・Hさん

個人で考えただけではなかなか思いつかなかったこともみんなと話し合うと、少し文集の完成像のイメージが出来てきた。ただ、実際、形にしようと思うと、かなり時間のかかることではあると思うので、みんなと協力しながら取り組みたい。

6 / 27 S・Kさん

レイアウトやコンセプトを決定するのにも、4人が意見を出し合えば、簡単には決まらない。それぞれがこだわりを持った案ではあるが、採用されなかったものもある。それ以上のものができれば良いと思う。高校生が知りたい情報をピンポイントで伝えたい。

6 / 27 R・Mさん

自分が高校生や保護者だったら、どんな冊子だったら読みたいと思うかという視点から考えるのをおもしろかった。文字の大きさやスタイルも変化を加えた方がよいのではないか、絵も入れた方がよいのではないかなど様々な意見が出てきたのでよかったと思う。

第十一講 7月4日 特別講義「基礎講座―伝えるための表現のくふう―」

編集会議に入ったこのタイミングを見計らって、実際に情報を編集し発信なさっている山陽新聞社の瀬尾由紀子氏をお招きして、特別講義「基礎講座―伝えるための表現のくふう―」を設定した。瀬尾由紀子氏は、情報を伝える新聞を具体的に示しながら、新聞の「特徴を知ろう」「工夫を知ろう」という構成で、「書き方」「見出し」「レイアウト」など伝えるためのくふうについてお話くださった。受講生は、まさに自らがこれから情報発信者として文集の編集に取り組んでいるため、問題意識を高めており、集中して講義に向き合っていた。Y・Hさんは、特別講義を受講して学び得たことを、次のように記している。

7月4日 Y・Hさん

感想・学び得たこと

私は、瀬尾さんのお話の中で、多くのことを学び得ることが出来た。その一つが、見出しの構成である。私は今まで、新聞を読む時、見出しのみを読んでいた。授業で新聞スクラップを作る時も見出しを読み、その見出しから興味を持った記事を切り取っていくという新聞の読み方であった。そのため、私は瀬尾さんの「見出しは究極の要約ですよ」という言葉を聞き、なるほどと強く納得した。見出しだけを読んで、自分の興味を持てる内容か判断するという行動が出来るのは、見出しに記事の情報が凝縮されているためである。私たち読者が何気なく見出しを読み、情報を取り込んでいるのは、新聞の一番の工夫であると知ることが出来た。

そして、わずか7〜10文字の中に「何がどうした」という情報を入れ、さらに読者を惹きつける見出しを作ることは、たいへん難しいことだと自分で見出しを作り実感した。私は、新聞の見出しに編集者の方の技術がまつていると考えるため、今後新聞を読む時、その技術を学ぶような視点で読みたい。

もう一つ、瀬尾さんのお話の中で心に残ったことがある。それは自分が作った記事を客観的に推敲するということである。記事を作る上で、最も大切にすべきことは読み手のことを考えることであり、そのために記事を何度も客観的に推敲するのである。読み手の年齢層、環境などを考慮し、伝えたいことを一貫して書くことは難しい。しかし、大切なことであるため、常に読み手を気遣う姿勢を崩さないようにしたいと思う。今、取り組んでいる文集では、高校生に楽しんでもらえる読みやすい記事を作ろうと考えている。書いているうちに、あれも伝えたい、これも伝えたいと、自分の気持ちを優先させてしまうかもしれない。しかし、このコンセプトを忘れず、読み手にとって本当に価値のある文集を作っていきたい。

Y・Hさんは「見出しは究極の要約ですよ」という言葉に納得し、「わずか7〜10文字の中に『何がどうした』という情報を入れ、さらに読者を惹きつける見出しを作ることは、たいへん難しい」「新聞の見出しに編集者の方の技術がまつていると考える」と記している。ここには特別講義を受けて、見出しの工夫の価値に目を向けている学習者の姿があらわれている。

さらに、Y・Hさんは「瀬尾さんのお話の中で心に残ったことが

ある。それは自分が作った記事を客観的に推敲するということである。」「最も大切にすべきことは読み手のことを考えることであり、そのために記事を何度も客観的に推敲するのである。」「常に読み手を気遣う姿勢を崩さないようにしたいと思う。」「このコンセプトを忘れず、読み手にとって本当に価値のある文集を作っていきたい。」と記している。ここには、表現者として大切にすべき、読み手を意識することの重要性を実感している学習者の姿が示されている。

学習者の一人であるA・Hさんはこの日の特別講義を受講して学び得たことを、次のように記している。

7月4日 A・Hさん

感想・学び得たこと

長年、山陽新聞社で記者として、数多くの取材を行ったり、記事を書いたり、部長としてもご活躍なさっている瀬尾さんのお話から、これからの自分に役立つ多くのことを学び得た。私は、文を書くこと自体は嫌いではないが、自分が伝えたいことを限られた空間（文字数）の中で、しっかりと相手に伝わる文を書くことは、ものすごく難しいことであると感じている。しかし、今日、様々なことを教えていただく中で、伝える文を書くことはもちろん簡単なことではないが、難しいだけでなく、読みやすく分かりやすいものにするために工夫し、考えることは楽しいことであるのだと感じた。

新聞では、トップ、かた、へそとあり、写真やグラフ等の位置や見出し、記事の大小など様々なこだわり、工夫によって、見た目も内容も魅力的で、読者のためになる記事を作っていることを

知った。また、インタビューでは、私は質問の内容ばかり、どうしようかと気にしていた部分があったが、もちろんその事前準備も必要ではあるが、より質の高いインタビューを行うために、それよりもっと大切なことは、よく聞くことや表情を見ることであると学んだ。やはり、相手に興味を持ち、誠実な態度で臨むことが、会話が膨らみおもしろい情報を聞き出せるコツだと分かった。

これから魅力的な文集に仕上げるために、まずは相手と目的（オープンキャンパスに参加した高校生や保護者の方々に、清心・日文の魅力を伝えること）を常に頭におき、内容や見た目の工夫をしていきたい。たぐさんの情報がある中で、全てが使えるわけではないため、写真やグラフ等と文字のバランスやレイアウトを考えながら、本当に相手を知りたい内容はどれか、自分が伝えたいことは何かを、照らし合わせながら、判断し、選択していかうと思った。

今回の講義を通して、新聞には伝えるための工夫がたくさん詰まっていることを知った。今後文集を作るうえで、その他の文章を書く際にも、新聞に頼り新聞の中の表現や見た目の工夫をヒントにしなから、少しずつ自分の力にしていきたい。今日は本当にありがとうございました。次回もよろしく願います。

A・Hさんは、特別講義を受講し、「相手と目的を常に頭におき」、「本当に相手を知りたい内容はどれか、自分が伝えたいことは何かを、照らし合わせながら、判断し、選択していかうと思った。」と記している。A・Hさんは情報の発信者として、相手と目的を意識して表現をくふうしていくことの重要性に目をひらかれている。

第十二講 7月11日 特別講義（原稿企画案発表、特別講師からのご助言）

第十二講では、瀬尾由紀子氏に引き続き来ていただき、全てのグループの原稿企画案の発表を聞いていただいた。そのうえで、各グループの編集会議に加わっていただき、具体的な指導や助言をいただいた。いずれのグループでも、第十一講の学びが生かされ、「相手と目的」を意識した編集会議が進められた。編集会議を進める中で、相手と目的を意識した瀬尾氏の具体的なご助言は、学習者にとって企画案を練り上げていく大きな力となった。受講生は、第十二講のコメントシートに次のように記述している。

7/11 A・Hさん

実際に瀬尾さんに見て頂き、アドバイスをしてもらうことで、まだまだ工夫次第でより良いものを作っていけると感じた。時間もあまりない中であるが、読み手を意識し、楽しみながら作りたい。

7/11 M・Oさん

レイアウトを工夫することで読み手が楽しんで読むことが可能であると感じた。文字を書くときはまず自分が楽しまないと伝わらないという言葉が心に残った。相手を意識した作品にしたい。

7/11 R・Mさん

図書館の使い方を実際に載せてみるというアイデアや絵を使うのは著作権に関わるかもしれないことなど、自分たちだけでは気付かなかったことに気付けたので良かった。他のチームも

すぐく構成が考えられていて、参考になることが多かった。

たいと思う。

第十三講 7月18日 編集会議Ⅱ（取材計画決定 原稿企画提出）

第十三講以降はPC教室を活用し、編集会議を行った。文集のタイトルは、受講生から募集した中から選び、「日文めぐり」とすることに決定した。また、題字担当者、表紙デザイナー担当者も決定し、全員の承認を得た。グループに対する瀬尾氏のアドバイスを生かして、グループの企画案が練り上げられ、それぞれが担当した原稿の作成に取り組みはじめた。第十三講の編集会議Ⅱのコメントシート
の記述は次のようである。

7/18 A・Hさん

文と図や写真のバランス、読みたくなるレイアウトの工夫が難しい。やるのがたくさんあるので、みんなと協力し相談し合いながら、時間を上手く使い良いものを完成させたい。

7/18 S・Kさん

文が全体的に長いと感じた。短くてかつ分かりやすい説明が出来るように考え直そうと思う。相手のことを考えて、分かりやすく見やすいように心懸けたい。

7/18 A・Kさん

レイアウトのことを考えていると時間がすぐたってしまった。おまかにつくってから細かいところを修正していきたいと思う。また、作るうえで読者を意識するというのを常に考えていき

第十四講 7月25日 編集会議Ⅲ（取材結果の検討、原稿執筆状況の確認、推敲）

第十四講では、取材結果の検討や原稿の執筆状況の確認、推敲などに取り組んだ。受講生は、取材を終えて、情報を整理し、選択して編集し、読み手を意識しながら原稿作成に取り組んだ。作成した原稿を互いに読み合い、推敲し合った。また、グループの代表者を集めて、目次の確認を行った。完成した題字と表紙デザインを紹介して、全員の承認を得た。今回は原稿提出となっていたため、各グループが必要に応じて行う自主的な編集会議の予定を確認した。第十四講のコメントシートの記述は次のようである。

7/25 A・Hさん

いよいよ完成させていく段階に入ってきたが、内容やレイアウトはもちろん、個人で作っているものもみんなと確認し、注意するべき所はチェックし良いものにした。

7/25 M・Oさん

見やすく、読みやすい文章を作ること心掛けながらページ作成を行っている。読んでくれる読者を意識しながら伝えたい内容を明確化し、面白い文集を完成させたい。

7/25 T・Yさん

文章ばかりにならないように、手書きのイラストをはりつけた

り、ペースをイラストにしたりと工夫した。読んでいて読み手の心を動かすことができるような工夫を加えたいと思う。

第十五講 8月1日 編集会議Ⅳ（原稿提出・学習整理・授業評価）

第十五講では、最終の編集会議を行った。おおむね完成した原稿を持参していたが、相互に読み合い、提出締切の時間ぎりぎりまで最終校正を行った。よりよい原稿にしようとする学習者の意欲が感じられ、各グループが完成原稿をそろえて提出した。第十五講のコメントシートの記述は次のようである。

8／1 M・Oさん

読者のことを考えながら文章を作るのは新鮮で「どうしたら楽しんで読んでもらえるのか」を念頭において作成した。この文集が清心を目指す人の手立てになってほしい。

8／1 M・Sさん

文集を作成することで、相手を意識して文章を書くことの重要性に改めて気づきました。作った文集が高校生の手が届くと思うと、やる気も違って、より良いものを作ろうと工夫することができました。

8／1 T・Yさん

文集作成が終わりを迎えた。他の人のアドバイスを聞きながら作っていくと、どう進めていくか、自分の中で明確にしながらできたと思う。これからの学習に生かすことのできる主体的な学習

ができて良かったと思う。

四 成果と今後の課題

本実践研究の成果と今後の課題について、学習者自身が講義全体をふりかえり、成果と課題を見つめて記述した学習記録のあとがきとお礼の言葉をもとに考察していく。学習記録の整理において示した自己評価の観点は次のようである。

学習記録の整理（自己評価）

*受講前と受講後の変容（学び得たこと、感じたこと、気付いたこと、考えさせられたこと、充実感、成就感など）を書く。

・本講義・特別講義の学びをどう生かしたか。

・どのような言語能力及びその他の能力が身についたと考えているか。

・今後の課題、今後の言語生活に生かしていきたいことは何か。

学習者の一人である、Y・Hさんが記したあとがきとお礼の言葉は、次のようである。

あとがき Y・Hさん

私はこの授業を通して、書くことが楽しいと思えるようになってきた。今まで、レポートを書く時や感想文を書く時など、構成、表現に特に気をつけず、だからだと書いていた。しかし、この授業を受け、「文章を書く時はラベリングすると良い」など、文章を

構成するやり方を学び、中身の詰まった文章を書けるようになったと感じている。さらに、読み手に伝わりやすいような表現を使えるようになったため、読み返した時の訂正が少なくなった。このように自分の文章内容が充実している実感が持てたため、書くことが楽しいと思えるようになった。

さらに、毎週、ペアワークをし、自分の考えを述べたり、相手の意見を引き出したりすることで、主体的な姿勢が身に付いたと考える。そして、私はその姿勢が身に付いたことで、書く能力の向上に繋がっていると考える。例えば、インタビュー記事を書く時、自ら主体的に相手の話を引き出さなければ、どんな文章も書けないと考えるためである。

この授業で学んだ、文章構成、表現のし方、そして、主体的な姿勢を確実に自分のものにし、より「文章を書くことが楽しい」と思えるようになりたい。

お礼の言葉

日本語表現法Ⅰの授業で、私たち一人一人に合った確かなアドバイスをくださったり、気遣った言葉をかけてくださったりありがとうございました。私は、文章を書く上で、自分では気が付かない部分を教えて頂いたため、客観的な見方が大切だということや学ぶことが出来ました。そして、どの授業でも、私たちが主体となる時間があり、とても楽しみながら授業を受けることが出来ました。Ⅱ期もよろしく願います。

(Y・H 二〇一七年八月一日『日本語表現法Ⅰ学習記録―主体的な姿勢を作る―』ノートルダム清心女子大学日本語日本文学科三年)

Y・Hさんは、学びの成果として、「文章を構成するやり方を学び、中身の詰まった文章を書けるようになった」「読み手に伝わりやすいような表現を使えるようになった」「自分の文章内容が充実している実感が持てたため、書くことが楽しいと思えるようになった。」と記している。ここには、表現活動を通して本講義の目標である文章表現力の向上を自覚し、「書くこと」への意欲が高まっている学習者の姿が示されている。なお、「客観的な見方が大切だということ」は、NIEを活用した瀬尾氏の特別講義で学び得たことであり、Y・Hさんは、表現者として貴重な気づきを得ている。

さらに、Y・Hさんは、学びのプロセスにおいて「私たちが主体となる時間があり」、「主体的な姿勢が身に付いた」と述べており、学習記録の副題にも「主体的な姿勢を作る」と記している。文集作成という課題は、まさに、学習者主体の活動であり、Y・Hさんは、文集作成のグループ代表として、原稿の完成を目指して、誠意を持ってグループ内の調整に心を傾け、主体的に取り組んだ学習者であった。

K・Nさんは、あとがきとお礼の言葉を次のように記している。

あとがき K・Nさん

私は以前まで文章を書くという行為が苦手であった。この日本語表現法Ⅰの授業では、今までできてきた「文章を書く」ということを、定義文を作ったり、描写文を書いたり、インタビュー記事を書いたりと同様行ってきた。そのような活動を通して、書くことが楽しく感じるようになってきた。そして、そのことをき

かけに私は今まで文章の書き方を知らなかったから、書くことが苦手であったのだということに気づくことが出来た。また、今まで苦手だから書かない、書かないから何も学び得ることがなく書き方が分からなくなる。更に苦手になるという負のループであった。しかし、この授業をきっかけにそのループから抜け出すことが出来た。

今回、文集を作成するにあたり、瀬尾さんの特別講義は、とても参考になった。特に直接アドバイスをいただいたり、アイデアを聞く機会があったのは、文集を作る際、とてもプラスになった。また、文集作りでは実際に高校生に配布するというところで、この講義で学んだ、文章の書き方、インタビュウの方法、見やすく、分かりやすいレイアウト法などを駆使して作成した。

これから、教員採用試験で志望理由や自己アピールを書いたりするなど、私のその後の人生を大きく左右しかねないような、「書くこと」が増えてくると思われる。そんな時にこの授業で学んだことを生かして自分のプラスにしていければと思う。

お礼の言葉

書くことが苦手だった私が、この授業を通して、苦手を克服することが出来ました。これは伊木先生が書くことの基礎・基本を教えた上で様々なジャンルの文を書かせてくれたからだと思えます。また、文集を自分たちで一からデザインし、内容を考え、インタビュウし、構成を考え、作成するという貴重な機会を与えてくださりありがとうございます。これで終わるのではなく、授業が終わってからも、様々な「書くこと」に挑戦したいと思えました。最後になりましたが、指導をしてくださった伊木先生、特

別講義でお話して下さった瀬尾さん、本当にありがとうございます。

（K・N 二〇一七年八月一日『日本語表現法Ⅰ学習記録―考えるよりもまず、行動―』ノートルダム清心女子大学日本語日本文学科三年）

K・Nさんは、「この授業をきっかけにその（書くことが苦手という負の）ループから抜け出すことが出来た」「活動を通して、書くことが楽しく感じるようになってきた」と記している。ここには、Y・Hさんと同じく、実際に書くという体験を通して、「書くこと」への意欲を高めている学習者の姿があらわれている。

K・Nさんは、「文集作りでは実際に高校生に配布するというところで、この講義で学んだ、文章の書き方、インタビュウの方法、見やすく、分かりやすいレイアウト法などを駆使して作成した。」と記している。ここには、実際に高校生に配布するという「実の場」が、主体的な学びに向かう意欲を高めたことが示されている。その際、「瀬尾さんの特別講義は、とても参考になった。特に直接アドバイスをお願いしたり、アイデアを聞く機会があったのは、文集を作る際、とてもプラスになった。」とK・Nさんが記しているように、学習者の必要感に応じた専門家の指導と助言は、有効に機能したと考える。学習者にとって必要感のあるNIEの活用が、主体的な学びの実現に有効であることがここに示されている。

R・Mさんは、あとがきに次のように記している。

あとがき R・M

日本語表現法Ⅰは、自分の文章や言葉に対する姿勢をとらえな
す機会となった授業であった。瀬尾さんの特別講義が特に心
に残っている。新聞の構成や工夫について、現場の声が聞けたこと
は、大きなことだと思う。文集作りに関しても、「実の場」を
実感する良い学習になっている。編集会議で、瀬尾さんからアドバ
イスをいただいたり、ページ作りのために、インタビューを実施
したりなどして、能動的な学習をこの授業では行うことができた。
この授業で学んだことを、今後の自身の文章生活に生かしてい
きたいと思う。伝えたいことを明確に書くことや、文章の書き出し
を工夫することなど、日々の生活に密着したことを思い出してい
きたい。後期の日本語表現法Ⅱも意欲的に学んでいきたい。

(R・M 二〇一七年八月一日『日本語表現法Ⅰ学習記録―言葉
のめざめ 様々な表現を学ぼう―』ノートルダム清心女子大学日
本語日本文学科三年)

R・Mさんは、「日本語表現法Ⅰは、自分の文章や言葉に対す
る姿勢をとらえなす機会となった授業であった。」「この授業で
学んだことを、今後の自身の文章生活に生かしていきたいと思
う。」「伝えたいことを明確に書くことや、文章の書き出しを工夫
することなど、日々の生活に密着したことを思い出していきた
い。」と記している。ここには、主体的な学びを通して、自己の
言語生活を見つめ、自身の文章や言葉に対する姿勢をとらえ直し、
学んだことを今後の文章生活に生かそうとする学習者の姿があら
われている。

「文集作りに関しても、『実の場』を実感する良い学習になっ
ている。編集会議で、瀬尾さんからアドバイスをいただいたり、ペ
ージ作りのために、インタビューを実施したりなどして、能動的な
学習をこの授業では行うことができた。」という記述には、NIE
の活用が、主体的な学びの実現に有効であったことが示されて
いる。そのプロセスにおいて、「瀬尾さんの特別講義が特に心
に残っている。新聞の構成や工夫について、現場の声が聞けたこと
は、大きなことだと思う。」とR・Mさんが記しているように、
NIEの効果的な活用が、主体的な学びの実現に有効に機能した
と考える。

本稿では、教職課程における主体的な学びの実現に向けてNIE
の活用が有効に機能することを、具体的な実践の考察によって
明らかにした。課題としては、学習者にとっていかに必要感のあ
るNIEの活用場の設定できるかということがあげられる。成
果と課題を整理すると次のようになる。

- (一) 言語生活の向上を目指して、言語能力を育成するとき、主体
的な学びの場の設定が必要である。
- (二) 主体的な学びの実現を目指すとき、NIEの活用はその一つ
の方法として有効に機能する。
- (三) NIEを効果的に活用するためには、学習者にとって必要感
のある活用場の設定が重要である。

大切なことは、主体的な学びを実現するために、指導者がNIE
を効果的に活用するという考え方に立つことである。学習者を

中心に据え、主体的な学びを実現する一つの有効な方法としてNIEを効果的に活用していきたい。その際、学習者の実態をふまえて、学習者主体の言語活動の場を設定し、学習者にとっていかに必要感のあるNIEの活用を設定できるかということが重要である。

おわりに

国語教室において「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められている現在、教職課程における主体的な学びの実現は緊要な課題である。教職課程において「主体的・対話的で深い学び」を体験し、その必要や効果を実感することは、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指して、単元構想しようとする指導者の育成につながる。

教職課程における主体的な学びの実現には、さまざまな方法が考えられるが、NIEの活用は一つの有効な方法である。NIEを活用した主体的な学びを経験した教職課程履修者は、自らの教室において、NIEを活用して主体的な学びの場を創造していくにちがいない。

本実践研究では、山陽新聞社読者局NIE推進部長、瀬尾由紀子氏の協力を得ている。瀬尾由紀子氏には、本実践のねらいをお伝えし、ねらいに即して特別講義の内容を工夫していただいた。ご協力に感謝するとともに、教職課程における主体的な学びの実現を目指して、今後も継続的にNIEを効果的に活用していきたい。

注1 エヌ・アイ・イー「Newspaper in Education」の略語

注2 文部科学省『中学校学習指導要領解説国語編』

二〇一七・六一～三頁

注3 文部科学省『中学校学習指導要領解説国語編』

二〇一七・六八～九頁

注4 大村はま氏による「単元 新一年生に石川台中学校を紹介する」の詳細は、『大村はま国語教室第一巻』（一九八二・一一・三〇

筑摩書房 二七一～四〇九頁）に掲載されている。

注5 大村はま氏は「作文の基礎力を養うための学習」一覧表をまとめており、「中学作文」はその一つ一つの練習に使った資料集である。大村はま氏の「中学作文」の実際は、『大村は

ま国語教室第五巻』（一九八三・八・三〇 筑摩書房 二八三～四一〇頁）に示されている。

参考文献・資料

+伊木洋編（二〇一七）『紹介文集 日文めぐり』私家版

伊木洋（二〇一六）「教職課程におけるNIE実践の有効性

—『日本語表現法I』における新聞スクラップブックの作成—

『ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日本文学編第四十卷第一号』ノートルダム清心女子大学 一～二一頁

伊木洋（二〇一七）「教職課程（中等国語）における単元構想力の育成—新聞を活用した単元構想の有効性—」『ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日本文学編第四一巻第一号』ノートルダム清心女子大学 一～一五頁

大村はま(一九七〇)『国語教室の実際』共文社

大村はま(一九八二)「単元 新一年生に石川台中学校を紹介する」

『大村はま国語教室第九卷』筑摩書房

大村はま(一九八三)「中学作文」『大村はま国語教室第五卷』筑摩書房

橋本暢夫(二〇〇二)『大村はま国語教室に学ぶ―新しい創造のた
めに』溪水社

橋本暢夫(二〇〇九)「NIEの先駆者大村はま―単元「新聞」に
よる「自己学習力」の育成―」『大村はま「国語教室」の創造性』

溪水社

橋本暢夫(二〇一三)『大村はま国語教室 全15卷 別巻1』巻別

内容総覧』溪水社

(いぎ ひろし)『本学文学部日本語日本文学科』

キーワードⅡ教職課程、NIE、大村はま